

県都甲府の顔となる開発プランが論議を呼んでいる。県庁舎建て替えと耐震化をめぐる動きである。県庁舎の耐震化検討委員会の答申によると、耐震化と防災の金看板が前面に押し出された建て替え案へのレールが引かれたようでもある。

「山梨県の近代化遺産」(県教委調査報告書)にノミネートされた一九三〇(昭和五)年三月完工の県議会議事堂・別館(旧本館)と同九月完工の第一南別館は、昭和初期の鉄筋コンクリート造りの貴重な建築物である。答申によると、旧本館は耐震補強改修で方向性が見えたようであるが、第一南別館は撤去も視野に検討が続けられることになったという。

もともと都市再生(アーバンデザイン)は、歴史に裏打ちされた基盤の上にごう新しく再生していくかというところから始まる。過去に創(つく)られた建築の意思をどう受け止めて使い、住み込むか、次世代は姿勢を問われることになる。つまり新しいものと歴史あるものが調和して都市基盤の中に融合されることなのである。

洗礼のご真ん中

かつて威風堂々のネオクラシズムの象徴であった歴史的建造物の甲府商工会議所(旧山梨貯蓄銀行ビル)が建

久保田 要

県庁舎整備と昭和の建築モダニズム



くぼた・かなめさん 1951年大阪府生まれ。一級建築士(まちづくり専攻建築士)で、山梨県建築士会理事、日本建築学会会員、山梨支所幹事、甲府市住吉5丁目

近代化遺産を現代の資産に

て替えられたときに、このよるることが再生の始まりである議論を行っただろうか。手早く事業をこなすこと観光立山梨の顔として、そこが先行し、先の二の舞いだけに洗練されたデザイン力がは避けたいものである。問われ、その事業の本質的なこの界限(かいはい)、商価値が県民市民に受け止めら人の町甲府の生き字引さんた

ちが年々消えてゆく。いま歴史的洗礼のご真ん中にある。都市の遺伝子をもう一度再生させるチャンスがあるとすれば今である。

後世に伝える義務

昭和初期のモダニズムはあと数十年で百年(一世紀)を生きた。県の教育には大きく寄与した根津嘉一郎の浄財で建てられ、旧県立図書館とし

てなじみの深い第一南別館の深い外観。近代モダニズム建築に託した根津の美学の遺産でもある。この歴史的建造物は戦後GHQの山梨軍政部となっていた。屋上に星条旗が掲げられていた。記憶のある方々もすでに七十代を半ば過ぎようとしてそれを南に下ると三十二年三月完工の旧甲府郵便局(現甲府市庁舎南庁舎)につながる甲府モダニズムを表す兄弟建築でもある。

空爆で焼け野原になってしまった甲府に遺(のこ)る貴重な地域遺産としての歴史的建造物を、後世に伝えるの

なお美しく活用

私は近代モダニズム建築を道して、山都(さんど)昭和物語(県議会議事堂・旧本館)第一南別館・甲府市庁舎南庁舎・法人会館」を観光ルートとして構築し、歴史的文化的遺産をいかした街づくりによる都市再生プランを提案したい。

赤レンガが印象的な東京駅周辺、かつてGHQ本部のあった三井本館などの保存と開発を見てもらいたい。文化遺産を資産に置き換え、保存と高度土地利用を両立させた事例は企業価値を上げた。横浜では、「歴史をいかした街づくりの要綱を適用し、旧横浜銀行本店別館(元第一銀行横浜支店)の保存に取り組んだ。鉄筋コンクリート三階建てのビルを曳き屋した後背敷地までいかし、観光資産に結びつけた街づくりに成功し、政策価値を上げた。



建設時の面影を残す県庁舎第一南別館



県庁舎旧本館



星条旗が翻るGHQ山梨軍政部屋上(第一南別館＝J・スターヴェレン蔵)



旧甲府郵便局(現甲府市庁舎南庁舎)

地域文化遺産を地域文化「資産」として捉(とら)えなおし、県民の生活の歴史をベースとした地域経営を前面に、歴史をいかした街づくりを進めていってほしい。味のあるまちは創れる。廃虚になってもなお美しく活用する。建築は時を経てその価値を見いだせるのである。

文化

(15号) 品から大作まで約三十点を出品。八王子の甲府道場(ニノフカ)